

ギリシア史におけるエーゲ海權の意義

——ベルシア戰役以後におけるベルシア

ギリシア兩民族抗爭の一場面として——

村田 數之亮

一、序——二、アテナイ海上帝國——三、アテナイ海上帝國の瓦解とベルシアの干涉——四、覇者スパルタとエーゲ海權——
五、アンタルキダスの和約——六、第二回アテナイ海上同盟——七、結

一、序

イタリア半島と地勢上に背合せをなし、歐洲本部とは重疊する山脈によつて隔絶せられてゐるギリシアにとつて、東方の「液體の途」こそ先づ許された交通と發展の途であつた。而かも地味は瘠せ、平野に乏しとすれば、この海上即ちエーゲ海——散在する多數の島嶼、世界に稀なる海岸線の發達、潮流の關係など凡て幼稚なる航海に幸してゐる——に出で、或は交易し、或は植民することが、彼等ギリシア人の生きる道であつた。さればこそ、彼等は迅くにエーゲ海の周邊に發展して、前六、七世紀のイオニアは經濟、文化に互つてギリシア世界の指導的地位を執つた。そして言ふ迄もなく、イオニア繁

榮の因は交易にあつて、その主なるものはエーゲ海に依つた。エーゲ海周邊の世界こそ先づ最初に成されたギリシア世界であつたといへる。

やがてペルシアの西進はイオニアを壓制し、エーゲ海の平安を擾し、大海軍は陸軍と共にギリシアに殺到した。しかしサラミス、プラタイアイの決戦はペルシアを歐洲の海陸から驅逐して、エーゲ海は完全にギリシアの海となり、ギリシアの最盛期が開かれた。そしてアテナイはこの海の制海權の掌握者であり得たがために、よくギリシアの覇者であり、第一の富める國であることができた。ギリシア史における海上支配の意義は、傳クセノフオン Pseudo-Xenophon の「アテナイ人の國家」[Athension Politeia] に言ひ盡されてゐる。海の征服者 [Thalassokratores] は從屬國の輸出入に壓迫を加へ得ることによつて、それ等の國の糧道を握つて活殺自由であり、諸國が聯合して謀反する機を防ぐことができ、また己は交易による利を享受し、敵國の無防禦地を不意に襲ふことができる (H. 217, II 3) ①。

一方、ギリシアとペルシアとの争はペルシア戦役の終ると共に終つたのではない。むしろ始まりであり、爾來交渉は斷續し乍ら、アレクサンドロスのペルシア遠征にまで至ると見るべきであらう。そしていま私はこの見解の下にペルシア戦役後の兩國の關係を辿らんとするのであるが、この場合、兩國の交渉は當然その間に介在するエーゲ海を舞臺とせざるを得ない。常にギリシア人が口にし、ギリシア覇邦の標語である「小アジアのギリシア人の自由」——ペルシア戦役の勃發時から、降つて凡ての

對ベルシア戦士が掲げてゐる②——はその現實的な内容、具現においては、エーゲ海權の自由であるまいか。對岸諸市が自由であれば、エーゲ海は全くギリシア人の海であり得るから。

上述の如きギリシアにおける海權の意義がベルシアとの交渉に當つて如何に作用するか、即ちギリシア史においてエーゲ海權が如何に意味するか、が私の取上げた課題である。

註① 「アテナイ人の國家」の著者が強調する海上支配はただ商業國家に關する限りは眞であるが、跛行的な經濟的發達を持つギリシアにおいては、他の農業國家に對しては、妥當ではない。しかし此等の國家にとつてもエーゲ海權は異なる意味において即ち備兵問題に關してまた重要な關係を持つと考へられる。このことは第四節に述べる。

② イソクラテスの諸著を初め、スパルタに對する小アジアギリシア諸市求授の辯 (Xenophon, Hellenika. III. 1. 3) 、スパルタの出征軍指揮官とベルシアとの交渉に當つても常に條件となつてゐる。(Hell. III. 2. 20; 4. 3)

二、アテナイ海上帝國

さきに「アテナイ人の國家」の筆者が述べたるところを、ハーゼブレック Hasebroeck はより端的に、より具體的に次の如く言つてゐる。ギリシア國家にあつては扶育 Ernährung が對外政策の基調であつた。この扶育と他國を犠牲とする食物の供給こそは凡ての Grosse Politik の、凡ての外交界の、また急進的民主思想の最高目標であつた。ギリシア國家が得んと努めたものは決して商權、また國家工業の原料仕入地と輸出地ではなくして、生活必需品に對する支配と獻金を納める從屬國の支配、即ち他國の生活と生存の可能性を己が手中に收めることであつたと (Stat u. Handel im alten Griechenland. S.

150)。ここに彼が謂ふ *Kapitalism* なギリシア通商とギリシア帝國主義の特質がある①。

ギリシアにおいては早くから食糧を國外に求めざるを得ない國勢になつたがために、他國の食糧道を扼することはギリシア帝國主義の一特色をなしてゐた。そして陸上交通が不便未發達であるに反して、エーゲ海が交通の道であつた場合、この海上の支配こそ、自らを生かすと共に、他を制する手段であつた。よき政治家の任務として、最も廣範圍に互つて海上を支配すべきことがギリシアにおいては擧げられる。

黒海地方、エジプト、小アジア、シリア、トラキア、マグナ・グレキア、シシリア、リビアがギリシア世界への食糧品——勿論先づ穀物②——の供給地であつたが、西方交易は地勢及び商業國家がギリシア西海岸に發達しない結果、東方交易の比ではなく、主にコリントに任ねられてゐる。そして商業國家の大部を含むエーゲ海岸及び島嶼の諸國には、黒海地方が最大の供給地であつた③。前四世紀のペレウス港 *Pelraeus* の穀物輸入額八〇萬メデイムノス中その半はポントスから輸入されてゐる (*Demotheus*, s. *Lept. 453*)。ポントス北岸スキタイア *Scythia* の穀物はその産出殆んど無盡であつて、早くからギリシア世界に輸出されてゐた (*Herodotos*, IV, 17; *Strabo*, VII, 311)。またポントスの魚は鹽漬にしてギリシア萬人の食卓に上つた他に鹽の生産地であり、また奴隷の多數がこの地方から供給された④。しかもこの地方の住民は文化低くして、ギリシア文化に慄れ、ギリシア加工品——陶器、家具、武器

織物、酒——の有利な市場であつた^⑤。

ポントス地方に次いでエジプト、シリアが重要であり、この貿易に當つてロードス、キプロスが樞紐點として重視されてくる^⑥。イオニア地方はペルシア戦役の創夷によつて、またペルシアの壓迫によつて再び立たない。また海軍國に必要な船材であるが、それは殆んどトラキア、マケドニアに求めなければならなかつた^⑦。殊にストリモン Strymon 上流地方が重要な産地であり (Hdt. V. 23)、しかもその附近のバンガイオン Pangation 山脈は有名な産金地である (Hdt. VI. 46. Strab. frag. 34)。依つてギリシアの海國はこの方面の獲得或は交易の確保を缺くべからざるものとして、早くからミレトス、アテナイは此處に着目してゐた (Thuk. IV. 102)。かくの如くにしてポントス航路とトラキア海岸の維持とは、エーゲ海權の核心であつたといへよう。

四七八年に第一回海上同盟はアリストイデス Aristides によつて創められ、キモン Kimon ヘルクレス Pericles によつて完成されたが、それは前述したやうなギリシア帝國主義の最も完成した具體化であつた。サラミスの決戦に續いて、アテナイ海軍はその翌年のミカレ Mykale 岬の海戦に勝ち、續く年にはプロポントス東岸の要害の地セストス Sestos を陥落し (Hdt. IX, 115-116) スバルタのバウサニアに率ゐられる同盟國海軍はビザンティオンのペルシア守備隊を降した (Thuk. I, 94, 128, Dioid. XI, 44)。そしてクセルクセスの最後の試みであつた二百隻のフェニキア海軍もパムフィリア Pamphilia のエッ

リメドン Eurymedon 河口においてアテナイのキモンのために撃滅され (Plut. Kimon. 12; Thuk. I. 100)、エーゲ海からペルシア海軍は悉く消滅した。イオニア全土は既にミカレの戦勝を機として、ペルシアの支配に反抗して起つてゐたから、エーゲ海周辺の地に敵影を見ざるに至り、エーゲ海は完全にギリシアの海となつた。そしてデロス同盟こそはこの全きエーゲ海を包含し、その盟主アテナイこそはその制海権を掌握した。

エーゲ海を制したアテナイは、キモンの大志によつて四五九年二百隻の艦隊をキプロスに送り、更にエジプトの叛亂を助けるためにニイル河口に轉せしめた。ペルシアを地中海から追出し、フェニキア、シリア、エジプトに連る沿海即ち全東部地中海をギリシアに服屬せしめんとするものであつた。しかしキモンは死し、戦績は擧らず、反つて四五六年にはメムフィス附近にペルシア艦隊によつて殆んど全滅の苦杯を味はされた (Thuk. I. 109-110)。以後アテナイにも再擧の意志なく、對スバルタ戦を考慮して、遂に四四九年ペリクレスはこの方面への進出を斷念してたゞエーゲ海々上権の確保を以て満足したる所謂カリアス Kallias の和が成立した^⑥。

アテナイはキプロス及びエジプトにおける占領地を放棄し、大王の支配する地に出兵せざることを約し、またペルシア戦役及びデロス同盟の目的であつた「小アジア・ギリシア人の自由」に就いての承諾をも斷念した。たゞペルシア海軍はリキア海岸のファセリス Phaselis 島とボスポロス海峡入りのキ

アネエン *Kyaneen* より西方に、即ちエーゲ海上に航せざること、またその陸軍は以上の間にあつては海岸より三日騎馬行程以内に進まざることが約定された (*Diod. XII. 4*)。

この條約はペルシアはキプロス、フェニキア、エジプトをギリシアより安全にし、アテナイはエーゲ海を中心とするその海上帝國をペルシアより安全にせんとする一つの協定であつた^④。キモンの雄大な計畫を放棄したこの協調によつて、東方の強國に對する國民戰役は終結して、アテナイはその海上帝國の整備に専ら力をむけることとなつた。

既にデロス同盟は參加國が割當ての船艦また兵員の提供を金錢を以て代納し、その海軍の指揮權と共同資金の管理をアテナイに託することによつて、同盟國はアテナイに歲貢する從屬國に化し、ハーゼブルックの謂ふ帝國主義國家アテナイが成立してゐたが、ペリクレスによつてアテナイ海上帝國の強化工作は完備した。彼は共同資金をアテナイに移し、トラキア、ヘレスポントス、イオニア、カラア、エーゲ海諸島の五歲貢區を制定し、キオス、レスボス、サモス以外の諸市の自治權を奪つて了つた。

そして帝國の糧道はケルソネソス *Chersonesos* ——ヘレスポントスの口を扼し、アジアより歐羅巴に至る至便の地——を初めとし、レムノス *Lemnos*、イムブロス *Imbros*、アンドロス *Andros* におけるクルルキア *Klarchia* によつて^⑤固められ、ビザンティオンの對岸カルケドン *Chalkedon* にはも

し必要なれば同盟國の穀物輸入高を制限することを得て (CIA. I. 10) ⑩、同盟國の生活は全くアテナイの手に握られた。またアンドロス、ナクソス Naxos の植民 (Plut. II. 19)、サモスへの移民はエーゲ海南半におけるアテナイ勢力の根柢をなしてゐた。また四三七年にはアンフィポリスを建て、ストリモン地方の船材と黄金を獨占するを得て、海軍力維持に關する憂を一掃することができた。

四四〇年のサモスの背叛に當つては、さきのカリアスの和の不徹底さの報として、サルデスのヒスタスベスのサモス援助、フェニキア海軍の來援の報に脅かさねばならなかつたが (Plut. I. 115-17)、アテナイの海上勢力に微動だも與へ得ずして、反つてこの島に移民してアテナイの地歩を固め、ビザンティオンも同盟に復歸した。かくてアテナイの海上支配は愈々固く、エーゲ世界にはアテナイの貨幣が支配的通貨となつて、經濟的獨裁が成つた。エーゲ海及び周邊の商業國家は、如上のアテナイ獨裁のために商工業は多少の障害壓迫を蒙つたが ⑪、アテナイに唯々として献金して従屬する限りは、とも角食糧の缺乏に困しむことなく、エーゲ海権は絶對他民族に擾される憂なくて、ギリシア世界は平安であることができた。

しかるにペロポネソス戦役はこのアテナイ海上權を打破せんとするに當つて、ペルシアの助力を乞ふたために、爾來ギリシアはペルシアの干渉に惱まされねばならない。

註⑩ マイヤー Ed. Meyer はギリシア交易の目的を商業的な利となし、アテナイ海上帝國を「同盟地域の商業的な統一」と見做すが

(Gaz. d. All. III. 494) キリシア商業における資本の弱小と食糧供給を以て國策の一とする立場からの通商に對する種々の國家の干渉を考へる時、むしろハーゼンブルクの見解に従ふべきであらう。

② 商人といへば先づ何よりも穀物商人を意味し(Hasbroeck, S. 150)、三九九年頃のビレウス港の輸入總額二千タレントの内、その半は穀物、残る半は他の食糧品と工業原料とであつた(Beloch, G. G. III. I. S. 327.)

③ ヘルシア戦役以前にミレトスが主として黒海地方に進出して、多くの植民地を創めたが、その重要な輸入品は勿論食糧品——穀物、鹽魚——であつた(Glotz, Ancient Greece at York p. 106.)

④ Glotz, p. 193. Neunuth, Antike Wirtschaftsgeschichte. S. 48. など、ドナウ河によつてロシア内地から羊毛、毛皮、貴金屬が齎され、ホントス南岸地方からは木材、鐵、亞麻を産出した。

⑤ スキティア諸王がいかにギリシアの生活に憧れたかは Hdt., IV. 78 f. また近代の考古學的發掘がそれを實證してゐる。

⑥ Boeckh, Staatshaushaltung d. Athener. I. S. 99 f.

⑦ キリシアにおいて船材は樅と松類が主に使用されたが、此等の木は磨滅破損し易きために、常に新船の補給が必要であつた。そして主産地はマケドニアとトラキアであつた(Neumann-Partzsch, Griechische Geographies. S. 370 ff.)

⑧ タソス占領によつて四六六年以來初まつたスパルタとの争は四五年休戦となつたが、危機未だ去らず、且つキモンの死が和平氣運を起さしめた。

⑨ Friedensvertrag zwischen ein Abkommenであり Übereinkunftであつた(Busolt, G. G. III. I. S. 343 f.)。小アジアのギリシア諸市はヘルシア王に獻金するに及ばないが、大王は公式に彼等に對する權利を放棄したのではなかつた(Beloch, G. G. II. I. S. 177. u. A. 27.)

⑩ テルモンネソスに就いては Diod. XI. 88 (一千人) Plut. Perik. II; 19 アンドロスに就いては Plut. Perik. II. レイノス、イムプロスに就いては Busolt, G. G. III. I. S. 414.

⑪ 四二四年ペロポネソス戦役中の非常時において、メトネ人に對する發令である。

ギリシア史におけるエーゲ海權の意義

第十九卷 第四號 六七三

⑫ アテナイは西部地中海にも進出してコリントと競争して南イタリアに植民地を建て、四五七年には通商の競争者アイギナと、*China*を倒して、交易を獨占した。

三、アテナイ海上帝國の瓦解とペルシアの干渉

戦開かれて十年目の四二四年スバルタのブラシダス Brasidas はトラキア遠征を試みた。彼は陸路北上してカルキデイク Chalkidike、マケドニアと結び、トラキア海岸要地アムフィポリス及びその附近の諸市を征服し (Thuk. IV. 102 ff.)、アテナイ海軍にとつて最も重要な船材の供給地と豊富なる産金地を奪ふことに成功した。かくエーゲ海の北邊に漸く暗雲あらはれ始めるとともに、東邊にはアテナイによつてその商權に打撃を受けたミレトス Miletos、エフェソス Ephesos 及びレスボスがスバルタに味方し (Thuk. VIII. 11; 19)、更にペルシアはカリアスの和を破つて四三〇年にはイオニアの要地コロフォ *Kolophon* とその港ノタイオン Notion を占領してゐた (Thuk. III. 34)。

アテナイはシシリア遠征の失敗によつて殆んど海上權力を失ふかに見えたが (Plu. I. 35. 36) その屈服はその糧道たるポントス航路を封鎖して初めて可能である。依つてそこにはアテナイ海軍が監視を怠らなす (Xenophon, Hellenika. I. 1. 35. 36)。海軍が弱く、而かも南方ギリシアに本據するスバルタにとつて、そのためには資力に富みて小アジアに關係深いペルシアと結ぶのが、最も捷徑であるが、恰もペルシアに新たに登極したダレイオス二世は小アジアのギリシア諸市に對するペルシアの所有權を確立せん

志がある。彼はアジア海岸州の總督に命じて、ペルシア戦役以來絶えてゐた領内のギリシア諸市の歳貢の取立を行はしめんとした(Thuk. VIII. 5)。またサルデス知事ファルナバツオス Pharnabazos にも同様な望があつた(VIII. 6)。そしてその實行のためにはアジアのギリシア諸市の後援者たるアテナイを倒す必要があり、こゝにスバルタとの結託は決して不利でなく、むしろ望ましきものである。四一四年兩國の間に條約が結ばれた。

それによれば相互の勢力範圍の不可侵、單獨講和の禁止等の他に、大王が所有し、また先王達が曾つて所有したりし凡ての領土と都市とは大王に所屬し、兩者は協力してアテナイが此等地方より得たりし金錢其他の納付を阻止することが定められた(Thuk. VIII. 13)。條文上からはエーゲ海諸島、トラキア、マケドニア、テッサリア、中部ギリシアの大部に至るに迄、ペルシアは所有權を認められたのであつた(VIII. 13)。しかし大王の意圖は勿論アジア本土に限られたが、この條約によつてエーゲ海の完全なるギリシア所屬のみを確保したカリアスの和約は破られて、その東岸は東方の強國に所有され、それによつて以後エーゲ海權が擾さるべき機會が開かれた。翌年この條約は再度の改訂を経て、大王の所有權は「アジアに於ける限り」なる制限が明示されたが(VIII. 13)、實質上には變化はなかつた④。そして改訂條約には大王の領土における戦の軍費は大王が負擔することが明記されて、スバルタは多大の利を得たが、この約定はペルシアに金錢の力によるギリシア攪亂の可能性を教へたものであつた。

そして既にスバルタ海軍は軍資の直接の供給者なる總督ティサフェルネス Tissaphernes の制肘を受けねばならなかつた (VIII. 45; 76. Plat. Lysandros 4.)

この間接のエーゲ海干渉の外に、ティサフェルネスはフェニキア海軍を整へてスバルタ軍に加はらしめんと計り (VIII. 45; 50)、次いでヘレスポントス方面の戦に自ら参加し (Hell. I. 1. 9; 11)、またアビドス、カルケドンの救援に赴むいた (Hell. I. 2. 16; 3. 8)。アジア側は全くペルシアの勢力下にあつたのである。一方スバルタ軍もミレトスから北上して、ヘレスポントスを渡り、ビザンティオン、キツイコス Kyzikos (Thuk. VIII. 80, 107. Diod. XIII. 40) を従へ、翌年にはイダ Ida の南麓アンタンドロス Antandros に海軍の根據地を設けて (Hell. I. 1. 25)、アテナイの糧道に迫つた。

アルキビアデス Alkibiades の活動によつて、アテナイは四〇八年にはアジア側にてはカルケドンを陥し、歐羅巴側にてはビザンティオンを陥落せしめ、セリンブリア Selymbria を奪還し (Hell. I. 3. Diod. III. 66 f.)、トラシブロス Thrasymbulos はタソス、アブデラを回復した。そしてカルケドンのことに關しては知事ファルナバツオスと休戦して、この町の獨立を認め——歳貢の義務はあるが——更に大王に使節を派遣した (Hell. I. 3. 4. 1)。アテナイにとつても大王との了解が必要となつてゐたのである。

しかしスバルタの熱心な懇請によつて大王は王子キロス Krios を小アジアに派遣し、彼又私財の

提供をも辭せぬ決意を示したから、スバルタは充分な軍資金を得て、アテナイに最後の打撃を加へる日が近づいた。小アジアの諸市及びエーゲ海諸島はレスボス、キオスを初め多く背反してゐる時^②、北部エーゲ海即ちポントス航路のみが僅かに死守されてゐたが、いまやミタイレネ、アルギヌサイ Arginsai の海戦に大勢は決し、四〇五年のヘレスポントスのアイゴスポタモイ Argospotamoi の戦はアテナイ帝國の事實上の瓦解を宣言した。

アテナイの糧道は全く閉ざされて、アテナイ市には餓死者さへ生じ (Hell. II. 3. 11; 14; 21) 落城の日が來た。降伏の條件はデロス同盟の解散、十二隻に海軍の制限、ピレウス港の防備と長城との破壊であつた (H. 2. 30)。こゝに堅固なエーゲ海權を基として立つてゐた海上帝國は亡んで、スバルタの目的は果された。しかしこの勝利はペルシアの助力によつて、而かもペルシアの干渉權を許容して成就されたものである時、今後スバルタがいかにやうにエーゲ海權を保持するか問題になつてくる。

しかしペルシアの意圖は常にアジア大陸に限られて、決してエーゲ海上權の掌握にはなかつた。國內には豊饒な天產物資が満ち足りたペルシアにとつて、貧しい西方世界との交易は必要でなかつたから。ペルシアにはたゞその豊かな國土を確實安全に保持すればよかつた。しかしそのためには小アジアの領有は是非必要であつた。もしこの地方に寸尺の地をギリシア人に許せば、彼等はその旺盛な活動力を以て、内地に侵入し、富める國土を荒涼して止まないであらう。かくてペルシアにとつて小ア

シア海岸も是非守るべきであるが、またギリシアにとつても前述した如くにエーゲ海権の保證のため、必須である。この間に處して、覇者となつたスバルタの使命があつた(Thuk. VIII. 15)。

註① 最初の和約は概括すれば、一、大王及び先王の曾ての領土は凡て大王に屬す、二、單獨講和禁止、三、大王またラケダイモンより反するものは共同の敵とす、改訂により(VIII. 31)、一、二、及三條は變らず、四、大王の領土における限り大王の送リし軍隊の費用は王が負擔す、最後の改訂による(VIII. 33)、一、アシアに關する限りの制限を附す、二、相互の領土を冒さず攻守同盟、三、ヘルシア海軍到着迄はスバルタ軍の軍資は大王が負擔す、到着後は大王が貸與し得るも戰終結後返却のこと、四、ヘルシア海軍到着後は共同戰のこと。

② 四二八年にレスホス、四一二年にキオスとクニドス、四一一年ロードス、タソスなど重要な島は離叛を宣して、アテナイはこれ等の島を包圍したが、殆んど成功しなかつた。またメロスは元來スバルタに屬し、サモスも四〇四年にはスバルタに占領されたから、最後迄アテナイに組したのはその植民のゐるレムノス、イムブロス、アンドロスのみ。

三、覇者スバルタとエーゲ海権

アテナイ海上帝國瓦解後は、スバルタがデロス同盟に代るそのペロポネソス同盟によつてギリシアの覇者となり、その優勢な海軍によつてエーゲ海上權を握つた。しかし自足經濟を固執し元來の陸上國であるスバルタにとつて、エーゲ海は殊にアテナイが必須としたポントス航路は、それ程に重要な意味を持たない。四一二年また四一一年の條約によつて何の躊躇もなしに、小アジアのペルシア所屬を認めたスバルタである。しかし、ペロポネソス戰役に海軍を率ゐて活動した海將リサンドロス(Lysandros) はアテナイを倒すのみならず、全イオニア諸市から民主黨を掃蕩して、スバルタ的な寡頭

政府^{キア}を樹立せん志であつた (Plut. Lys. 5)。ペロポネソス戦後^{ナウアルコス}海軍指揮官に任命せられるや、彼は先づトラキア、ヘレスポントスを巡航し、更に小アジア諸市を訪れて、諸市に十人政府^{デカルキア}を樹立した (Plut. Lys. 19)。恰も謀叛の野望を抱いてギリシアの意を向へんとするキロスの了解の下に、彼の事業は進んで、服屬諸市に歳貢を命じ、その額一千タレントに達した (Diod. XIV. 10. 2. Plut. Lys. 9)。彼の勢力はヘレスポントスを第一としたが、尙ほ内地にファルナバツオスの領地を荒掠し (Plut. 19)、エーゲ海諸島を全く従へてゐた①。アテナイの海上帝國を再現せんとするのが彼の望であつたのである②。言ひ換へれば、農業的なスバルタを指導者とするところの、ギリシア商業帝國の再建設であるが、スバルタの國情が依然たる限り、成功は困難である。果してリサンドロスの行動は本國政府の反對に會つた。

四一年ファルナバツオスの抗議によつて、スバルタ政府はリサンドロスを召還した (Plut. 19)。本國政府の冷淡と③ペルシアの干渉とが、この折角の海上帝國の若芽を殺して了つたのである。かくてペルシアもギリシアもエーゲ海權に對する野心なく、ヘレスポントス地方はほゞペルシアから獨立の状態にあり④、イオニアはキロスに貢納し (Hell. III. 1. 3. Anab. I. 1. 6-8)、他のギリシア諸市はテイサフエルネスに従屬した。

しかるに小アジアとの關係がスバルタ政府にもエーゲ海制海の必要を痛感せしめるに至つた。キロスの叛亂はスバルタとペルシアとが戦ふべき機縁をなした。スバルタは八百の重歩兵を派遣したのみ

ならず、その海軍は遠くキリキア *Chalkis* に航して、キロスの進軍を助けた (*Hel. III. 1. 17*)。ペルシア戦役以來スバルタが初めて海上にペルシアと對抗したのである。更にキロスの戦死、テイサフェルネスのイオニア併合、イオニアのスバルタに對する求援は、遂にスバルタをしてギリシアの覇者としてペルシアと争はざるを得ざるに至らしめた。イオニア諸市が「ギリシアの覇者として」のスバルタに彼等の自由の保護を乞ふた時 (*Hel. III. 2. 20*)、それに應じて出兵したことは、所謂ドリア主義の放棄である。次いでリサンドロスの友なるアゲシラオスなどが小アジアに侵略を行ふこととなるが、この小アジアとの交渉によつてエーゲ海が、ギリシア史上に持つ一つの重大な意義が與へられた。しかしそれはアテナイにおけるとは異つた意義においてあつた。

前にも述べた如くにスバルタもペルシアもポントスの食糧品に依らぬ國であり、いま小アジアのイオニアが兩國の抗争の中心場面となつた時、エーゲ海はスバルタと小アジアとの連絡において初めて重視される。即ちイオニアのエフェソスはリサンドロスによつて復興されて以來、スバルタ陸軍の上陸地である根據地であり^⑤、またその海軍はリサンドロス以來ロードスを本據とした^⑥。そして軍の糧食は主として掠奪また諸市の納付によつたが、もし必要であればエジプトから供給された (*Diod. XIV. 79*)。エーゲ海はアテナイ時代と異つて、その南半部が漸く重要な意義を持つてきた。

扱て、スバルタの小アジア侵入を目して、覇者スバルタの行動とするのは、單にイオニア救援なる

その題目のためではない。私はそこに四世紀ギリシアが課せられた問題、即ち傭兵問題の解決がそれに關聯して考察せらるべきであると思ふ。一體傭兵はペロポネソス戦役によつて急速に發達して、一般的な現象になつたのであるが②、三〇年に互る不斷の内争が成長せしめたこの國土なき職業軍人は、戦熄みて何處に行くか。久しい戦亂によつて萎微した商工業界、荒廢せる田園が、此等の財なく手に職なき失業軍人を收容する餘地がない時、彼等の仕末はギリシア世界の新たな大問題でなければならぬ。アテナイはスバルタのティブロンの小アジア遠征に、嘗ての三十僭主に仕へた三百の騎兵を傭兵として提給し、「もし彼等が國を去つて、他郷に死ねば、國家の利益になるであらう」(Holl. III. I.)と考へてゐる。

傭兵として最も聞えたのはアルカディア Arkadia 人であり、その取引の中心はコリント或は半島南部のタイナロン Tainaron であり (Dioid. XIII. 21; III; 118)。ペロポネソス半島が傭兵の中心であつた③。ために傭兵問題はスバルタが最も痛感したであらうが、恰もよしキロスの四〇二年の反亂は——僅かペロポネソス戦後二年——此問題を一時的に解決し、一萬二千なるギリシア世界空前の大軍が集められたのであつた (Analysis. I. 2; 3)。しかるにクナクサ Knaxa にキロスが戦死したため、軍の目標は消失し、一萬の傭兵軍はクセノフォンなどに率ゐられて小アジアに迄歸還したが、それを如何に處理すべきかは結局スバルタに課せられたといへよう。ギリシアの覇者として、またペロポネソス

半島に本據を置くスバルタとして、この不定な兵力に基づく半島の不安を除去し、同時に覇者たる聲望を高めるために、當然その處置は肩にかゝつてくる。

傭主キロスを失つた兵士をギリシア本土に歸還せしめずに、そのまま他國にて働かすこと、即ち敵國において養はれることが差當つての解決策でなかつたか。スバルタが、最初に派遣したテイブロン [Thibron] の軍は先づ「キロスに従軍して、安全に歸還した軍隊が、彼の軍と合したる後」(Hell. III. 1. 6; Anab. VII. 8. 34)、周圍の都市の攻略を初め、テイブロンに代つたデルキリダス Demetrias 軍の主力も明かに「キロスに従へる」兵であり (Hell. III. 9. 7)、次のアゲシラオス Agasilaos においても、騎兵、新市民が重歩兵、同盟國の軍隊、キロスに従ひて兵の四分團中、キロスに従ひし者の軍團の指揮に任じたのは、三十人の軍事委員會の長たるヘリッピダス Heripidas であつた (Hell. III. 4. 30)。スバルタ帝國主義の一動因として、こゝに傭兵處置問題を考へることができらるであらう。

そしてそのために目覺しいスバルタの掠奪行が行はれる。テイブロン、「リサンドロス黨の」テルキリダス (Tudela, S. 45)、リサンドロスの友なるアゲシラオスの小アジアにおける攻略は切りに糧食、金錢の掠奪、次いでそれ等の提供を條件とする敵との休戦^⑥が傳へられて、其間に組織的な進撃は認め難い。デルキリダスにしてもアゲシラオスにしても小アジアにおけるペルシアの中心地サルデス——アレクサンドロスは直ちに此所を衝いた——を飽く迄陥れんとする意圖が弱い^⑦。そこには一時的な

傭兵問題の解決、即ち彼等を敵地において養ふことが當面の問題であつたからではあるまいか。しかしとも角この攻略によつてイオニアは元よりヘレスポントス、アイオリス、ドリスの小アジア沿岸、更にカリヤ、フリギヤからは敵地が没して④エーゲ海上権は全くスバルタの手にあつた。アゲシラオスは小アジア諸市及びエーゲ海諸島に命じて一二〇隻の海軍を建造せしめて充實をはかり、更に海陸軍の指揮官を分つて、整へるところがあつた(III. 4. 28)。

註① Judeich, Kleinasiatische Studien. S. 30 f.

② 彼にはプルシア遠征の大望があつた(Plut. Lys. 28)。後小アジアに侵入したアゲシラオスは彼の計畫の追求者であつたといふ(『Judeich S. 79』)尙ほリサンドロスを海上帝國の計畫者と見るのは(『Judeich, S. 78 f. Jude, La formation du peuple grec』 p. 283.

③ Plut. Lys. 19 f.

④ Kalchedon, Chrysopolis, Kyzikos, Lampsakos などのヘレスポントスの要地、トロアスの Arandros アイオリスの Atarneus などはスバルタの後援の下にまたギリシアの默許の下に獨立を獲、Sion, Myrina などはヘルシアに朝貢した(『Judeich, S. 40 f.』)

⑤ ヘロポンネソス戦役中にリサンドロスは當時姿微頽してゐたエフェソス港に船を集め、商船に二に貨物を集めしめ、造船所を建てて、昔日の盛觀を取返さしめた(Plut. Lys. 3)。爾來 Thibron, Denkyllias (Hell. III. 1. 8; 2. 9) Agestilas (III. 4. 4; 4. 6; 4. 16) などに此處を根據とし、以後も亦然り(Diod. XIV. 39)。

⑥ ヘロポンネソス戦役中リサンドロス、ダリヘウニス Darius (Hell. I. 5. 1; 6. 3; I. 1. 2) がこの嶋から海軍を集めたのを初

ギリシア史におけるエーゲ海権の意義

第十九卷 第四號 六八三

めとして、Hierax (V. 1. 5) Phrax (Diod. XIV. 79) は、この海軍を集めた。vgl. Pausanias. VI. 3. 15.

⑦ 原隨園博士「ギリシア史における傭兵の問題」史學雜誌昭和八年十一月號二二頁 Pufkes, Greek Mercenary Soldiers. p. 206.

⑧ キロスの集めた傭兵軍はアルカティア人が大部を占め、次いでアカイア人であり (Xenoph. Anabasis. VI. 2. 10)、またアル

カディア人の傭兵として卓越せることを一マンティネア人は誇つてゐる (Hell. VII. 1. 23)。原博士、十五頁、二八頁參照。

⑨ テイフロンは同盟都市の掠奪をその兵士に許せりとの理由にて召還後處罰され (Hell. III. 1. 8)。テルキリダスはアイオリス

のメイディアス Medias を主として八千人の一年間の給料を (III. 1. 28)、「ヒテイニアには多くの食糧を (III. 2. 2)」「アタルネ

ウスにても多くの穀物を (III. 4. 12) 分捕り、アゲシラオスはフリギアへの途中多くの掠奪品を (III. 4. 12)、「サルデスへの進軍中に

も多くの食糧と七〇タレントに價する分捕品を (III. 4. 21)、「ファルナブツオスの陣營の跡からも多くの分捕品を (IV. 1. 24)

得てゐる。またアゲシラオスは軍隊の食糧として三〇タレントを得て休戦する (III. 4. 25)。

⑩ もつともギリシア騎兵の弱勢が軍事上の原因をなしてゐるが (Hell. III. 4. 15)、「この故にもマケドニアはヘルシア討伐の資

格を持つてゐる。
⑪ Hell. III 4; III 6; IV 1.

五、アンタルキダスの和約

スバルタの小アジア荒掠を阻止せんためには、ギリシア本土に黄金を散布して反スバルタ同盟を成長せしめ、彼等をしてスバルタ本國を衝かしめることが、最良策なるを遂にペルシアは發見して、目的を達することができたが①、同時にまたスバルタのエーゲ海上権を奪取する必要もあつた。こゝにペルシアの海上進出が始まる。既に三九七年フェニキアに三百隻のペルシア海軍が準備された (Hell.

III. 4. 1. *Plut. Ages.* 60) として海軍に不得手なペルシアは幸にも、キプロス王エウアゴラス Euaforas と彼の許に亡命中のアテナイ海將コノン Konon の才能に委任すればよかつた。

同年コノンはペルシアの海軍指揮官に任命され (*Diod. XIV. 81*)、ファルナバツオスが提供した資金によつて新造された四〇隻を合せて (*Diod. XIV. 89; 79*)、スバルタ海軍の本據ロードスに向つた。スバルタ海軍はなほ優勢であつたが②、二九五年コノンの奇襲によつてこの根據地を失ひ、この不幸を知らずに五十萬メデイムノスの穀物と百隻分の船材を満載してエジプトより歸港した船を奪取された (*Diod. XIV. 79*)。こゝにスバルタ海軍は根據地を失ひ、大擴張の計畫を畫餅に歸し、更に海國に不可缺の穀物と船材とを得べき南方との連絡を斷たれた。シシリアまたコノンと結んでゐたから (*Ibid.*)、恰もアテナイ海上國の末路と同じ状態におかれた。曾てロードスにあつたスバルタ海軍一二〇——敗戦によつて減少してゐる——に對し今コノンのペルシア海軍は一八〇 (*Ibid.*)、スバルタの制海權は没落した。コノンはかくて敵に屬する海岸諸市を脅かしつゝ、ケルソンネスに赴むいた (*Ibid. Isot. Pameg. 142*)。

一方、陸上にてはアゲシラオスが引上げた後は、殘留部隊には更に攻勢に出でる勢も力もない。コノンはロードス占領後、自らスーサに赴いて大王の援助了解を確實にするところがあつた。その海軍は彼の理想通りに充實してきた。そして翌年のクニドス Knidos の海戦はスバルタにとつてアイゴスボタモイの戦でないとしても、少くともアルギヌサイの戦であつた。コノンの率ゐるアテナイ、キプロ

ス等のギリシア艦隊とファルナバツオスの率ゐるフェニキア艦隊とは、ペイサンドロス Peisandros が指揮する敵を撃滅し、その半以上五十隻を捕獲した (Hell. IV. 8. 11-12; Diod. XIV. 88)。スバルタ海上帝國は再び起たない。コノンはこゝに小アジア海岸を巡航して各地のスバルタ守備隊を放逐し——この内にはエフェソスもあつた——ヘレスポントス地方をも従へ、たゞアビドスとセストスを残すのみ (Hell. IV. 8. 15)。そしてロードス、サモス、エフェソス、イアソス等の小アジア西南部の諸市聯盟はアテナイと同盟した③。

翌年コノンはファルナバツオスと共に途中キクラデス諸島をスバルタから背反せしめながら、ギリシア本土に航し、コリントに催された反スバルタ列國會議に列した (Hell. IV. 8. 12; Diod. XIV. 89) ④。會議を終へて、ファルナバツオスはアジアに歸り、コノンは自ら造つたアテナイ艦隊を率ゐて、さきから自ら亡命した祖國に榮ある凱旋をした。ペルシアの提供した金と艦隊の兵員との力によつて、曾て海國アテナイの本據であつたピレウスの城壁が再築された。コノンはペルシアの將軍とはいへ、その海軍は全くアテナイのために奉仕し、資金は豊富に大王から與へられて、アテナイ海上支配の再興は「時の問題の如くに見えた」 (Beloch, Attische Politik seit Perikles. S. 120)。

アイゴスポタモイの悲しき敗戦を味つた將軍として、コノンは元よりアテナイ海権の恢復を目的としてゐたから、早くよりペルシアとの同盟が破れん日を豫想して、それに備へるために、エジプトと

同盟し、シラクサと結ばんと計つた^⑤。しかしキプロスのペルシアからの離反を機として、ペルシアとの關係が圓滑を缺くに至つた時、スバルタに代つて再びエーゲ海權を握つたかに見えたギリシア第一のアテナイ海軍の、空しき脆弱な姿が暴露された。サルデス總督に親スバルタ的なテイリバツオス *Tiribazos* が任命されて、スバルタのアンタルキダス *Anthalidas* の中傷によりてコノンが罷免監禁される時、何事も成し得ず^⑥、親アテナイ的な總督ストルタス *Struthas* のスバルタ再戦によつて蘇生する海軍である。しかも最早やペルシアの軍資金供給が絶えて自立の止むなきに至つたアテナイ海軍は、三九一年タイプロンには容易にエフェソス上陸を許し (*Hell. IV. 8. 17. Diod. XIV. 98*)、ロードスの寡頭派援助のスバルタ海軍の航海を許し、クニドスを敵に委ね、サモスを敵の同盟國たらしめてゐる (*Hell. IV. 8. 30-33. Diod. XIV. 97*)。三九一年キプロスのエウアゴラスの獨立の旗擧げは、もしアテナイ海軍にして實力と意志さへあれば、この島によつてペルシア海軍の根據地フェニキアを抑へ、以てエーゲ海に海權を樹立すべき好機であつたにもかゝらず、如上の状態にてはペルシアの鼻息を伺つて、キプロス救援隊の派遣も華々しくなく^⑦。

この不確實なアテナイ海權に獨立の能力を與へんとしたのが、トラシブロス *Thrasyllos* であつた。三九八年ロードス島に民主黨援助のために赴むいた彼は、その目的を差し置いて、カリヤ、イオニアの海岸を巡つて、諸市と同盟を結びつゝ、彼の目的地ヘレスポントスに向つて北上した。これこそペ

ロポンネソス戦役の最後の日以来、独立のアテナイ海軍が小アジア海岸に現れた最初であつた。タンス、サモトラケ、ケルソネソス、ビザンティオン、カルケドン、たゞアビドスを残してトラキア海岸諸市及トラキア王と同盟し (H^{ell.} IV. 8. 26-28. Diod. XIV. 21)、アテナイ海上権の重點をなす地方は回復された。そして同盟國に課した港灣税とボスポロス海峡の通行税とはペルシアの軍資金に代つて海軍を養ふに足りた。スキロス、レムノス、インブ罗斯は三九三年以來アテナイに所屬して居り、他のキトラデス諸島も殆んど同盟に加入し、スバルタの勢力は小アジアに僅か残るにすぎない^⑧。アイゴスポタモイ戦前のアテナイ海上帝國はほゞ再現された。しかしなほこの場合にも少くともヘレスポントス附近の懷柔にはペルシアとの従來の和親關係が與つて力あつたことは注意すべきである (H^{ell.} IV. 8. 27)^⑨。

しかしアテナイ海上帝國の出現は到底ペルシアの默許するところではない。親スバルタ的な總督テイリバツオスの赴任、アンタルキダスの活動はペルシアをしてアテナイ討伐を決せしめた。ペルシアの後援によつて再興したスバルタ海軍は、テイリバツオス及びシラクサの海軍を併せて、ヘレスポントス附近に活動を開始した。アテナイ海軍は壓倒されて振はず、ポントスの糧道は阻止されて、アテナイは再びアイゴスポタモイの苦汁を嘗めなければならぬ (H^{ell.} V. I. 28)。こゝに所謂アンタルキダスの和約が提出されて、翌三九六年成立した^⑩。

先づこの條約によつて小アジアのギリシア諸市のペルシア所屬が、從來の如くにギリシアの一部によつてではなく、殆んど全ギリシア諸國によつて承認されて、エーゲ海權の完全なる支持はギリシアにとつて不可能になつた。またキプロスがペルシア領となることによつて、エジプトとギリシアとの連絡——エーゲ海南半の重要な糧道である——が不安になつたに反し、ペルシア海軍はその根據地フエニキアの前面に存在した危険な障害を除くことができた。またギリシア各國は獨立たるべきことによつてアテナイ海上帝國の再現は絶望になつた。レムノス、インブロス、スキロスの三島の所屬は認められて、ポントスへの聯絡は保ち得たが、小アジアがペルシア領であつては、プロポントスの咽喉は何時封鎖されるやも知れない。トラシプロスの夢ははかなく消えた。しかもこのアテナイが當面した歎きは、ペルシアの羈者たらんとする何れの國も當面すべきものである。エーゲ海上權の不安定と從屬的な同盟の禁止を前提として、何處にギリシア統一再生の途があらうか。

その上ペルシア軍資金の斷絶と小アジア不可侵の規定によつて、ギリシア本土は職業的失業軍人の汎濫に悩まなければならぬ。四世紀以降諸物價の騰貴にもかゝはらず、傭兵の給料が昔のまゝであつたこと⑩、即ち價値の相對的な下落は、かやうな供給過剩も一因をなしてゐないであらうか⑪。そして傭兵のギリシアへの歸還によつて、ギリシアの内訌は益々激しく、ペルシア王は傭兵を必要とする時には、ギリシアに平和を命ずればよかつた。アンタルキダスの和約はギリシアの南北糧道を不

安にし、傭兵の活動舞臺を閉鎖して、ギリシア世界を自滅の運命においたといへる。

註① ヨノンの献策によつて、大王は使者をギリシアに派し、反スバルタの立場にあつたアテナイ、テバイ、コリント、アルゴスに軍資を提供した。ここに聯合軍はスバルタに迫つたため、アゲシラオスに歸國の命が發せられた。(Hell. IV. 2. 1-4 Plut. Ages. 15)。

② Diod. XIV. 79.

③ Judeich, S. 80.

④ 恐らくヘルシアと反スバルタ諸國との間の同盟を形式的に整へ、補助金の交附、對スバルタ戦の繼續などが、議定されたと考へられてゐる(Judeich, S. 81. Busolt, Zweite Attische Seehund. S. 669)。

⑤ ヨノンは既にロードスの海戦前にシシリヤに赴むらて戦の必需品を得、戦後の海軍中には十隻のシシリヤの船が加はつた。(Diod. XIV. 79)。⁹ 更にヨノンは使者をテイオニシオスの許に派して、スバルタと絶縁し、アテナイと同盟せんことを求めた。スバルタ、ヘルシアの聯合に對してアテナイ、エツプト、キプロス、アルゴス、ホイオティアの五國同盟を意圖したのである。しかしテイオニシオスよりはただ中立の約定を得たに止まつた(Reinach, S. 121 f.)。

⑥ Hell. IV. 8. 13 f. Judeich, S. 83-86.

⑦ Judeich, S. 88.

⑧ アテナイと同盟し或は和親なるものは Thasos, Samothrake, Chersonesos, Byzantion, Knich'on, Prokonnesos? Parion? Tenedos, Mytilene, Antissa, Eresos, Chios, Halikarnassos, Phaselis はその名が傳へられ、なほリキアもアテナイの勢力下にあつた。スバルタ側(す)は Parkote? Abydos, Antandros, Lesbos, 嶋一部 Ephesos, Knidos (Judeich, S. 102)。

⑨ 原隨園博士「オリントスの陥落」(史林、昭八、七月號二〇頁)。⁹ 尙ほ本節におけるスバルタ、ヘルシア、ギリシアの關係の理解は同論文第三節「アンタルキマス條約」と同一とならざるを得ざりしことを、先生に深謝する次第である。

⑩ この條約はヘルシア王によつて起草されて、サルデスに集つたギリシア諸國の使節の前で恰も大王の指令の如くに讀まれて渡された (Hall, V. 1. 31. Dioid. XIV. 110)。その内容はクラッソメナイ、キプロスを含むアジアの諸市は大王の所屬たること、他のギリシア諸市は凡て自由にして獨立たるべく、但しレムノス、イムアロス、スキロスに從前通りアテナイに屬すること、この條約に不滿なる者に對してはヘルシア王はその見解を等しくする者と共同して、陸上に海上に海軍と黄金とを以て戦ふこと。

⑪ 原博士「ギリシア史における傭兵の問題」三四頁。

⑫ キロスが集めた一萬二千の兵は當時迄にはギリシア史上空前の大軍であつたが、デモステネスの頃アテナイがコリントに派遣した軍の内には六千乃至一萬の傭兵があり (Dem. I. Philib)、フェライのヤソン Jason の持つ精兵の名高い傭兵軍は六千 (Hell. VI. 1. 5)、神聖戰役時代のフォキスの軍には二萬の騎兵と五百の歩兵を數へた (原博士、上掲論文二五及二八頁)。

六、第二回アテナイ海上同盟

アンタルキダスの和約によつてスバルタの覇者たる地位は、一度は保ち得るとしても、ポントス航路を棄て、小アジアを放擲して、何處にギリシアの覇者があらうか。しかしスバルタはヘルシア王との和親を求めるに吸々として (Diod. XV. 28)、その活動をギリシア本土に限定し、キクラデス諸島さへ顧みない。このスバルタの自己主義が再びアテナイをしてラケダイモンに對するヘレネスの自由と獨立とを確保するために、第二回海上同盟の結成を可能ならしめたのである。キクラデス諸島は單に同民族の意識のみからではなく、エーゲ海の不安定がその存立を困難ならしめる商業國である以上、ま

た自らその平安を保證し得る方のない以上、本國の強國に頼るの外はないのである①。こゝに三七年キオス、ミティレネ、ロードス、其他の島々及び同様の條件にあるビザンティオン (Diod. X V. 38) がアテナイと結び、或は同盟を更新して、第二回海上同盟が生れた②。

アテナイを指導者とする海上同盟は常にポントス航路に重點を置く③。そしてこの航路の確保に成功する時は、アテナイ海權の復活する時であるから、スバルタは懸命にアテナイの進出を妨害した。

エーゲ海のケオス Keos、アンドロス Andros の邊りに海軍を派して、アテナイへの穀物輸入を妨害して困らした (Hell. V. 4. 61)。しかし三七年ナクソス Naxos の海戦によつて、スバルタの海軍は再び起らず、アテナイの目的は達せられた④。この戦勝によつてアテナイは糧道の安全を回復したのみならず (Hell. ibid.)、更にカブリアス Chabrias の活動によつてタッス、サモトラケ、アイノス Ainos、アブデラ Abdera 等のトラキア海岸諸市及びカルキディケの参加によつて廣くエーゲ海北部に勢力を伸した。またロードス、メロス、パロス Paros なども同盟して、エーゲ海の南半もアテナイと和協しアテナイ海上帝國はまたもや再興した如くであつた⑤。

しかしペルシアに對するヘレネスの解放を目的とする第一回の同盟に比べて、アンタルキダスの鐵則の下に許されたこの度の同盟は、その本質において相異してゐた。先づ參加國を大王に屬せざるヘレネス及び非ヘレネスに限定して⑥、小アジア海岸とポントスを、即ちリキアからシノペ、トラペツ

ント Trapezunt の間の地域を放棄し、また献金を廢し、ソロン以來のアテナイ傳統政策なる植民地の所有を斷念し、盟主の指導權を認めずして (Diod. XV. 38)、地域的にまた統制力において甚だ劣つてゐた。加入國は七〇を超えたが (Diod. XV. 30)、第一回の時に比べて三分一或は四分一にすぎない。しかもカルキデイクの中心オリントス Olynthos とアムフィポリスを洩したことは、北部エーゲ海を重視すべきアテナイ海權にとつて大なる缺損であつた。オリントスの不参加は對立的な商業的勢力の存在を意味し⑦、アンフィポリスの不参加はアテナイの財源のみか、アテナイ海軍をして常に船材の供給に不安な思ひあらしめてゐる。

三七一年スバルタとの間に和約が成立して、海上におけるアテナイのヘゲモニーが公に承認され、ギリシアの代表としてエーゲ海權を掌握することになつたが (Hel. VII. 1. 45, Diod. XV. 30)⑧、この和がペルシア王の勸告によつて成つたものである以上、アテナイのヘゲモニーも結局はペルシアに許された、即ちアンタルキダス條約の遵奉の條件の下にのみ許されたものに外ならず、眞に力ある獨立のものではない。

しかしこの和によつてケルソネソスとアンフィポリスの領有を認められたことは、アテナイの大なる收穫であつた。こゝに三六五年セストスに植民を送り⑨、またアンフィポリス攻略に着手した。この情勢にカルキデイクがアンフィポリスと同盟して、アテナイに對抗したため、三六四年以來ティモ

テオス Timotheos のこの方面における活躍がある。しかし數年に互る戦績は香ばしからず、ポテイダイアに植民してまた若干の都市を同盟に参加せしめたが、オリントスは依然として抵抗を續け、アンフィポリスの富は回復されなかつた^⑧。

眞のギリシア海上同盟はアンタルキダス條約の侵害によつて、即ち小アジアを手に入れて初めて可能である。テイモテオスのサモス征服、——そのペルシア兵を驅逐して——三六五、三六一、三五年の三回の植民は彼の小アジア帝國再現の計畫の一端である^⑨。サモスはイオニア支配樹立のために好適の地點であるから。

かくアテナイ海權の回復の業が徐々に進行し得るにすぎない時、一方にはテバイの勃興がこの業を脅威しつゝある。エバミノンダス Epaminondas はギリシア制覇のためには海權掌握の必要を洞察してゐたが (Diod. XV. 78)、それにはまたもやペルシアの助力が求められた。即ち三六七年ペロピダスはスーサに赴むいて、アンタルキダスの和約の附則として自國の特殊利益の立場から作らしめた大王の書翰を將來した。當時アジアの總督の叛亂に抗するために、ペルシア王はレウクトラ戦後のギリシアの強國と和親を結んで、傭兵を得る必要があり (Hell. VII. 1. 35)、またアテナイのサモスにおける行動とそれを默許してゐるスバルタは正にアンタルキダス條約を蹂躪せるものであり、一方テバイにとつてはアテナイ、スバルタの二強に對抗せんためには、アンタルキダス和約の實行を保證し、以て大王の同盟

とギリシアにおける平和指定者たる名を得る必要があつたのである (Busolt, Zweite Antische Seebund, S. 739)。
ブルトはテバイの勃興以來、アジアにおけるギリシア諸市の放棄が實際的な意味を持つてきたといふ (Busolt, S. 739)。

この條項によれば、アテナイはアンフィポリスに對する權利を失ひ、その海軍は武装を解くべきであつた (Hell. VII. 1. 85)。幸にもこの條約は實行されなかつたが (VII. 1. 40)②、アテナイ海權は大王の一言によつて脅威されることが立證された。エバミノンダスは海軍を率ゐて、エーゲ海を遊弋し、ビザンティオン、キオス、ロードスと同盟して (Diod. XV. 79)、アテナイ同盟は有力な加入者を失つた。間もなく、ティモテオスの奮闘はビザンティオンを征服し、ヘラクレイアと同盟したが (XV. 83)、ヘレスポントス地方におけるアテナイ支配は動搖し、セストスさへアビドスに、ケルソネソスはトラキアに (Dioskor. Aristokr. Schiller, I. 154) 占領されて、アテナイの穀物船は屢々脅かされ、ビレウス港の穀價が騰貴した (Demosthenes, s. Polykles) ③。

そして同盟戦役が結局アテナイ海權の分裂を招いた。三五七年ロードス、キオス、コスはカリアのマウソロス Mausolos ④と結んで、同盟脱退を宣し、先づキオスは都市港灣を閉ぢて、港灣税の納付を拒絶した (Diod. XVI. 79)。この離反にはビザンティオンも參加して、南部エーゲ海のみならず、アテナイの糧道に迄波及し、植民地にて固めたイムブロス、レムノス、サモスが攻撃されるに至つた。アテナ

イは六十隻の「アイゴスボタモイ」以來の大艦隊（*Method. S. 135*）を急造して、叛軍に對したが、ビザンテイオンと他の敵との聯絡を絶つて、ボントス航路の防衛に努め得たにすぎなかつた。その故に戰場は殆んどヘレスポントス附近海上に行はれた^⑩。而かもこの叛亂にはテバイの支持が充分に想像された（*Method. s. 282*）。

小アジア總督の叛亂は好機であつた。カレス（*Charis*）は三五六年ヘレスポントス、フリギアのアルタバツォス *Artabazos* の反を助け、その代りに己が軍を養ふに足る金錢を得た。アテナイの財政の窮乏は救はれて、海軍の維持が保證され、しかもヘレスポントス地方に勢力を確立する所以であつた。アテナイ人民の歡呼の内に、カレスは小アジアにて大王の軍を破つてゐる（*Diod. XVI. 32*）。しかしカレスの行動は明らかにアンタルキダス條約の破棄である。間もなくアルタクセルクセスの使者が、カレスを召還して、和約を保つべしとの抗議をアテナイに齎した。同盟戦役は終らず、國庫は既に枯渇してゐるこの時、噂は更に大王が三百隻の大海軍を以て同盟戦役の敵を助けんことを約したと。かくてカレスには歸還命令が發せられ、離反國との間に急遽無條件にて和が締結された（*Diod. XVI. 32*）。

こゝにアンタルキダスの和約は嚴として立ち、背反の強國は再び歸らず、アテナイ海上同盟とは空しき名にすぎない。フェライのヤーンソン亦海軍を持つて、ともすればテバイを助け（*Hell. VI. 4. 31*）、エーゲ海権は正に分裂に近い。しかも一方、海上權力の不振と共に海賊は切りに商船を掠め、海岸の都

市を荒し、要地に占據して、航海は愈々不安である。其上、多くの海上國が彼等からその掠奪物を手入するため、彼等の横行は助成される。海上同盟は法令を發布して、海賊から物貨を購入せる國には罰金を以て脅かしたが (Demosth. s. Theok.)、同盟自體が微力紛亂してゐる時、到底所期の效果は擧がらず、益々彼等の跳梁は甚しい。(Demo. Halionnesos)。

東邊には、カリアの活動は醒しくて、三五五年には、コス、ロードスを占領し、デモステネスはその救済を叫ばねばならない (Dem. Rhod.)。やがて小アジアの總督の亂が鎮まつて、ペルシア勢力はエーゲ海に迫り、海岸のみか、キオス、コス、ロードス、ミティレーネ其他に續々と親ペルシア的な貴族政府が樹立され^④、僅かにヘレスポントス地方にアテナイ勢力の殘影が止まるにすぎない。

① Judeich, S. 264-65.

② Busolt, S. 684 f. Beloch, Gr. III i. S. 149 A. 3 u. 4.

③ 同盟加入條約の批准は通例、同盟 (Synedroi) の常任委員がその國に赴いたのであるが——Methymna の場合の如く——ビザンティオンの場合には、アテナイの使節が同盟の名においてここに出席してゐる (Judeich, S. 269 A. 1)。^④これは勿論兩國の實力の相異にもよるが、一面にはアテナイのビザンティオンに對する特別な關心から出たものでもあらう。

④ ナクソスの戰によつて二十九年に互るスパルタの海上霸權は終りを告げたとデモステネスは言ふが (Philipp. III) プソルトもそれ以前におけるアテナイの制海權及び同盟の成立を否認してゐる (S. 750)。

⑤ Busolt, Cap. III.

⑥ 「非ギリシア人」とはマケドニア、トラキア、イタリアを考量してゐる (Busolt, S. 739 f.)。

- ⑦ オリントスの重要性については原博士「オリントスの陥落」殊に入頁。
- ⑧ この時陸上におけるヘゲモニーはスパルタが持つことが承認された。スパルタ使者の言によれば、海上から食糧を求むべき國々が、その近隣にあり、何れもアテナイより弱なること、アテナイが良港と海軍と多くの船舶を所有し、從來よりして海事に堪能にして、多くの成果をなした故に、當時海上ヘゲモニーはアテナイに屬すべきであると(III. VII. 1. 25)。
- ⑨ Schifer, Demosthenes u. seine Zeit. I. S. 101. A. 5.
- ⑩ Schifer, I. S. 94.
- ⑪ Schifer, I. S. 98 f. Judeich, 260; 275; 284「當時アテナイに小アジア帝國再興の古き希望が甦つてきた。そしてティモテオスがその負擔者であつた」Judeich, S. 273.
- ⑫ スパルタにはメッセニアの自由が要求され、テバイはイオニアの盟主であつた。しかし列國は餘りにテバイ本位にて、現狀に反するため反對し、成立しなかつた。
- ⑬ ビザンティオン、カルケドン、キツイコス等に對する統御は全からずして、或は入港を、或は穀物の陸上を強要してゐた。テモステネスのこの論文は三六二年頃のもの。
- ⑭ マウソロスに對して實質的には獨立状態にあつたが、彼のイオニア地方進出にはアンタルキダス條約がそれを容易にした(Baloch, G. G. III. I. S. 234)。
- ⑮ Judeich, S. 289.
- ⑯ Ibid. S. 295-96.

七、結

扱て、上述の如くにペルシアの勢力はアンタルキダスの和約を基礎として、エーゲ海権に對して最後の決定權を持つてゐる。アテナイの二回に互る海上同盟再建の企ても、ギリシアの覇者としてのス

バルタの制海權確立も、殆んど成らんとして、ペルシアの干渉のために脆くも頓挫した。しかるに四世紀半から新たなる勢力がエーゲ海北邊に起つて、アテナイ海權はその存亡を脅かされる。即ちマケドニアのフィリッポスの海上進出である。三六〇年既にペルディッカス Perdikkas はアンフィポリスと結んでゐたが、三五七年にフィリッポスは遂に之を占領した。アテナイは船材の唯一の供給地と最大の金鑛を失ひ、マケドニアはその代りに海上進出の準備全く成つた。一方マケドニアはカルキディケに進出を初め、三四八年オリントス Olynthos を陥落して、全半島を従へ、エーゲ海北方の海上國として現れてきた。この情勢にアテナイはアンフィポリスを占領されて以來、ペルシアと結んでこの新興勢力に對抗せんとして、エーゲ海權は三勢力の目標となつてきたが、マケドニアのギリシア進出は愈々急にして、三七一年ケーロネアの一戦は、マケドニアをしてギリシアの主たらしめた。こゝにマケドニアに當然ギリシアの覇者としての問題が課せられなければならない。即ち此迄述べ來つた如くに、ギリシアにおいては商業國家にとつても、また農業國家にとつても、エーゲ海こそ生きるべき途であり、その完全なる確保こそギリシア世界存立のために不可缺である以上、ギリシア世界を包含したマケドニアにもそれは不可缺でなければならない。フィリッポス及びアレクサンドロス軍隊には多くの傭兵があり、また依然としてギリシアの糧食の不足をマケドニアが補給し得ない以上、エーゲ海はギリシアの海でなければならない。かくて私はフィリッポス、アレクサンドロスのペ

ギリシア史におけるエーゲ海權の意義

ルシア遠征の必然性を見んとするものである。(終)

第十九卷 第四號

七〇〇